

「その触手生物は今、発情期でね。卵を産みつける場所を欲している。あなたは今日から、この触手と番^{つが}う家畜なんですよ」

ガラスの向こう側で、少年を見上げながら男が言う。

同時に、

「ああ……ッ！？♡」

太腿に絡みついていた触手の一本が、ぬるりと少年の尻の割れ目を探りあてた。

かと思うと、

「あッッ！♡♡」

オークの精液に濡れそぼつその孔へ、ぬぷ……と生温かくぬめったそれが侵入してきた。

「ひ、いいい……っ、♡」

あまりのおぞましさに悲鳴をあげるも、黒魔術のほどこされた身から漏れる声はどこか媚びるような響きで、ぞくぞくと背がしなる。